

DAY 1 | 筑波大生のビコールでの10日間。 多文化共修プログラムの記録

9つの国籍、異なる専門。3大学の学生が地域の現実に挑む多文化共修プログラム

午前5時30分、ビコール国際空港に到着



ゆっくりと夜が明け、町が少しずつ明るくなり始めた午前5時30分。私たち運営スタッフは、フィリピン・アルバイ州のビコール国際空港で、筑波大学の学生たちの到着を待っていました。

今回取り組むのは、ビコールの地域課題を自分たちで見つけ、現地の学生と解決策を考えること。筑波大学25名、ビコール大学15名、CBSUA(Central Bicol State University of Agriculture)10名の総勢50名が、大学や国籍を越えてチームを組み、10日間かけて地域への提案をまとめます。

2名の市長をはじめ、大学の学長、地域農協トップ、大学教授、そして多くの学生たちが、日本からの学生を歓迎し、ともに地域社会について考える10日間がいよいよスタート。

教室で与えられた問題を解くではありません。何が課題なのか。それを決めるところから始まります。頼りになるのは、自分たちの目と耳。そして、地域で暮らす人たちの言葉です。全てが一次情報であり、深く思い出に残る体験です。

まだ薄暗いビコール国際空港に、筑波大学の学生たちが到着しました。長い移動を終えたばかりですが、学生たちはバスの車窓から見える初めての景色に興味深そうに目を向けていました。

9か国、多様な専門を持つ25名



筑波大学から参加する25名は、日本人学生14名と、ケニア、インドネシア、ネパール、ルーマニア、ナイジェリア、モンゴル、インド、バングラデシュからの留学生11名。合わせて9つの国籍からなる、多様なメンバーです。

学士課程16人、修士課程7人、博士課程2人。材料科学や工学、情報、生命環境、医学を学ぶ学生がいれば、言語学、国際関係、教育、体育、人間科学を学ぶ学生もいます。ひとつの地域を前にしても、見る場所は同じではありません。

参加前の回答からは、自然災害や防災、気候変動、食料安全保障、農業とサプライチェーン、地域産業、災害情報の伝達、住民同士のつながりなど、それぞれが具体的な関心を持って参加していることが分かりました。

共通していたのは、『現地の人に直接聞きたい』という思いです。机上のデータでは分からない現実に触れ、異なる文化と専門を持つ仲間と答えを探したい。英語を学ぶための海外研修ではありません。地域の未来を考える実践の場です。

参加者	筑波大学生 25名
国籍	9か国（日本14名、留学生11名）
課程	学士16名、修士7名、博士2名
専門	理工・情報・生命、医療・健康、人文・社会・教育など

自然の豊かさと災害リスクが隣り合う地域



舞台は、ルソン島南東部のビコール地方。6つの州に約606万人が暮らしています。その象徴が、アルバイ州にそびえる標高2,462メートルのマヨン火山です。見事な円錐形で知られる山は、フィリピンで最も活発な火山の一つでもあります。

火山が育んだ土地では農業が営まれ、海では漁業が人々の暮らしを支えます。観光や伝統工芸もある。一方で、台風、洪水、地滑り、火山活動は、農作物、生産、流通、そして日々の生活を脅かします。豊かな自然と、自然災害。その二つが隣り合う地域です。

今回のプログラムでは、統計や資料だけで地域を理解するのではなく、そこで暮らし、働き、災害と向き合ってきた人々の話を聞きながら、地域の現状を捉えていきます。

空港から宿泊先へ。日本との違いを体験



参加者の中には、今回が初めての海外という学生もいます。空港から宿泊先へ向かうバスの窓に、見慣れない光景が次々と現れました。車の窓から積み込まれる荷物。人々が身を乗り出して町を走るジプニー。道路沿いに並ぶ小さな店。あちこちから『おおっ』と声が上がります。

宿泊先では、シャワーが（ほぼ）出ない。停電する。突然の雨。そしてフィリピンらしい強烈に甘いウェルカムドリンクなど、日本とは異なる環境をさっそく体験しました。

それでも、小さなプールではしゃぐ人。ローカルマーケットへ出かける人。部屋で静かに疲れを取る人。それぞれのやり方で、ビコールとの距離を縮めていきます。

大切なのは、違いを見つけるだけで終わらせないことです。こうした暮らしや仕組みに、自然、産業、歴史、人々の価値観がどう関わっているのか。私たちは何ができるのか。目にしたことから問いを持つことが、これからの学びにつながります。





シャワーから出る水は、わずか2本。お湯も出ません。トイレでは「タボ」と呼ばれる手桶で水を汲み、便器に流します。日本の学生たちにとって衝撃的だったことでしょう。

伝統産業と、火山とともに暮らす地域を知る



昼のオリエンテーションを終えた一行が最初に向かったのは、CamaligにあるSumlang Lakeです。マヨン火山を望む湖のほとりで、学生たちはアバカ繊維を使った伝統的な織りの実演を見学しました。現地では『pag-abul』と呼ばれる技法です。

アバカはフィリピンを代表する天然繊維の一つで、ロープや紙、織物、工芸品などに使われています。完成した製品を見るだけでなく、素材が地域の人の手によって形になっていく工程を見ることで、学生たちはビコールの産業と文化に触れました。

続いて訪れたのは、DaragaにあるCagsawa Ruinsです。ここには、1814年のマヨン火山噴火によって大きな被害を受けた教会の鐘楼や建物の一部が残されています。現在はNational Cultural Treasureに指定され、ビコールの歴史と、火山とともに暮らしてきた地域を象徴する場所となっています。

学生たちは、遺跡のすぐ隣にあるNational Museum of the Philippines – Bicolも見学しました。景観としてマヨン火山を眺めるだけでなく、この土地の自然と歴史、人々の暮らしがどのようにつながっているのかを学ぶ機会になりました。

お土産店で、火山被害についてインタビュー



Cagsawa Ruinsでは、見学するだけでなく、現地のお土産店でインタビュータスクにも取り組みました。テーマは、マヨン火山の噴火や災害が、地域の暮らしや商いにどのような影響を与えてきたのか。

初対面の相手に英語で声をかけ、質問し、相手の経験を聞き取る。簡単なことではありません。それでも学生たちは、それぞれに店の人との対話を試みました。資料から得た知識を、地域で暮らす人の経験と結びつけて考えるための、最初のインタビューとなりました。

ATVを楽しみ、Barisbisで初日のディナー



インタビューを終えた後は、マヨン火山の麓でATVを体験。土の道を走りながら、思い切り体を動かして楽しみました。体験後に撮影したグループ写真は、ここまでで一番盛り上がっていました。

一日の最後は、CamaligにあるBarisbis Filipino Restaurantへ。現地スタッフがおすすめる人気のフィリピン料理店で、初日のディナーを囲みます。会場では、盛大に誕生日ソングがうたわれる様子に、一同驚いている様子でした。

早朝の空港到着から、伝統産業、火山の歴史、地域の人へのインタビュー、ATVまで。長い一日を振り返りながら、学生同士の会話も少しずつ増えていきました。日本と全く異なる環境に、きっと、多くの想いを抱いたことでしょう。

さて、翌日からはビコール大学の学生たちが合流します。プログラムにはCBSUAの学生も加わり、やがて総勢50名による多文化チームでの活動が本格化します。初日に見聞きしたことが、どのような問いにつながっていくのか。10日間の学びは、ここからさらに深まっていきます。



DAY 2 | 筑波大学とビコール大学。 文化交流から始まる多文化共修

Flag Ceremonyから文化交流へ。8つの混成チームが活動を開始

BUメインキャンパスで迎えた朝



プログラム2日目。筑波大学の学生たちは、フィリピン・レガスピ市にあるBicol University (BU) のメインキャンパスを訪れました。朝のFlag Ceremonyには、教職員や学生とともに参加。大学全体の日常の中に迎え入れていただく形で、両大学の学生が顔を合わせました。

私たちフライト (PHLIGHT Inc.) からは、歓迎への感謝を伝えるとともに、このプログラムで大切にしたいことを英語で話しました。

「The most important part of this program is for the students from both universities to connect, learn from each other, and grow together.」

地域や文化を知ること。そして、ビコール地方が抱える現実の課題に対して、異なる大学・国籍・専門を持つ学生と一緒に解決策を考えること。10日間の中心にあるのは、知識を受け取るだけではなく、人とつながり、ともに考える学びです。

自己紹介から、8つのチームへ



Flag Ceremonyの後は、参加者一人ひとりが自己紹介を行い、筑波大学とBUの学生による8つの混成チームをつくりました。最初の共同作業は、自分たちのチーム名を決めることです。

Bicol Express、Team Magayon、Kapwa、Team Berde、Bigas Mug、Kinang Spaghettiなど、ビコールの食文化やフィリピン語を取り入れた名前が並びました。名前を考えるには、言葉の意味を尋ね、自分たちの好みを伝え、全員が納得する答えを探さなければなりません。小さな課題ですが、これから一緒に活動する仲間との最初の対話になりました。

「BUの学生と友達になりました。私にとって初めての外国人の友達です。」

— 筑波大学 長嶺啓介さん

BUの学生からも、「国籍や人種が違って、必ずつながる方法はあると学んだ」という声が寄せられました。まだ会って間もない二つの大学の学生たちが、短い会話から連絡先を交換し、少しずつ関係をつくっていきます。

キャンパスツアーで知る、BUの学びと日常



続いて行われたのは、BUの学生が案内するキャンパスツアーです。施設を見ることだけが目的ではありません。教室や学生生活の場を一緒に歩きながら、大学で何を学んでいるのか、普段どのように過ごしているのかを聞く時間になりました。

ある筑波大学生は、その日最も印象に残った出来事として「BU campus tour」を挙げました。ツアーやその後の説明を通じて考えたのは、水のことでした。日本では蛇口をひねれば水が出ることを当然のように感じていた。しかし、ビコールでは水圧や供給の事情によって、自由に使えるとは限らない。前日に体験したシャワーの水量も、地域の暮らしを考える具体的な入口になっていきます。

「日本では水道を当たり前のものと思っていましたが、それがどれほど恵まれていることなのかに気づきました。」

— 筑波大学の参加学生

言語、音楽、踊り、食。BUが用意した文化交流



午後はBU College of Educationが、言語と文化をテーマにした講義と文化交流プログラムを開催しました。Dr. Angela E. Lorenzanaによる講義では、フィリピンで使われる英語や、言語と文化の関係について学びました。学生の感想には、英語とタガログ語が自然に混ざる会話や、相手への敬意を示す「po」という言葉への気づきも記されています。

講義に続いて、Bachelor in Culture and the Arts Educationの学生たちが、Dr. Analiza PasanoとProf. Ma. Christine Joy Nericの指導のもと、音楽や踊りを交えた文化パフォーマンスを披露しました。単に演目を並べるのではなく、海外へ学びに出る若い世代と家族、自分たちの文化との距離を物語として描いた構成が、参加者の心をつかみました。

「家族を描いた物語が本当に素晴らしかった。フィリピンでは家族の結びつきがとても強く、人を温かく迎え、共同体を大切にしていることを学びました。」

— 筑波大学 Chowdhury Abdulla Nasirさん

フィリピンのゲームでは、見る側だった学生も自然に輪の中へ。歌と踊りが始まると、筑波大学の学生も立ち上がって踊り、会場は大きな歓声に包まれました。

「フィリピンのダンサーと歌手が素晴らしくて、Augustineが思わず踊り始めたことが、特に印象に残っています。」

— 筑波大学 Chowdhury Abdulla Nasirさん

食文化の紹介では、puto、rice cakes、suman、ibos、pinangatなど、地域で親しまれている菓子や料理を味わいました。言葉、伝統、音楽、パフォーマンス、そして食。BUの学生たちが自分たちの文化を、自分たちの言葉と表現で伝える時間でした。

「文化が違って、愛や喜び、希望には共通するものがある。そのことに気づきました。」

— Bicol University Abraham James E. Romeroさん

『No barrier』——交流の後に見えた変化



COMMUNICATION AND
PUBLIC RELATIONS OFFICE
BICOL UNIVERSITY
A University for Humanity

朝の自己紹介では、英語で何を話そうかと考えながら声をかけていた学生たち。しかし、文化交流を終えた頃には、その様子は大きく変わっていました。隣に座って笑い、写真を撮り、SNSを交換する。大学や国籍ごとの境目が、目に見えて薄くなっていました。

「ものすごい熱量に圧倒されました。同時に、フィリピンの方々が自分から打ち解けようとする姿勢に、とても学ぶものがありました。友好関係や文化交流は、自分から主体的に動くことから始まるのだと思います。」

— 筑波大学 松田年史さん

学生たちがフィリピンの人々について口にしたのは、「No barrier」「More expressive」という言葉でした。もちろん、一日の体験だけで国や人々を一括りにすることはできません。それでも、感情や好意を率直に表し、初対面の相手にもためらわず近づいていくBUの学生たちの姿は、強く印象に残ったようです。LGBTQ+を象徴するレインボーフラッグを身近に見かけ、性的多様性についてオープンに語る人の姿に気づいた学生もいました。

「文化や価値観がまったく異なるからこそ、お互いを尊重する姿勢が大切だと学びました。」

— 筑波大学の参加学生

『Welcome to the Philippines!』——文化についての質問は続く



文化交流の時間が終わっても、会話は終わりませんでした。帰りのバスでは、葬儀の場でカラオケをすることがあると聞いた学生が、「どうして？ 不謹慎ではないの？」と質問。すると、現地の学生が、その背景にある故人の送り方や、家族・地域の人が集まって時間を過ごす習慣について説明します。孵化しかけたアヒルの卵を食べるbalutの話には、「本当に食べるの？」と驚きの声が上がりました。

ホームステイに向けた説明では、水道のシャワーが十分に使えない場合の入浴方法も話題になりました。「No shower. But enough water.」という説明に続いて紹介されたのが、桶にためた水を小さな手桶で体にかける「tabo」です。話の途中で停電が起きると、BUの先生から返ってきたのは、笑顔でのひと言でした。

「Welcome to the Philippines!」

— Dean Ros

知らない習慣に驚き、率直に尋ねる。現地の学生が背景を説明し、一緒に笑う。正解を教わるだけではなく、違いを会話に変えていくことも、このプログラムの大切な学びです。

共通点を探しながら、次の学びへ



ある参加学生は、「異なる背景を持つ多くの人と仲良くなるには、共通点を一緒に探すことが役立った」と振り返りました。また、Ozuzu Augustine Ikennaさんは、文化や言語を通じて生まれた信頼が、災害レジリエンスのような地域課題に対する実践的な解決策を一緒につくる土台になると考えています。

「文化交流は難しい。でも、楽しい。」

— 筑波大学の参加学生

朝には初対面だった学生たちが、夕方には冗談を言い合い、一緒に踊り、生活や価値観の違いについて質問し合っていました。8つのチームが、名前だけではなく、人と人との関係として動き始めたDAY 2。ここで生まれた信頼を土台に、学生たちはこれからビコールの地域課題へ向き合っていきます。



DAY 3 | カカオからチョコレートへ。 生産と加工の現場で地域課題を学ぶ

ホームステイの朝からMURAVAH Foundationへ。農家の声を聞き、チームで考えた一日

ホームステイで触れた、フィリピンの家族の暮らし



プログラム3日目の朝。集まった学生たちに「ホームステイはどうだった？」と尋ねると、食事や家族との時間について、次々と話が返ってきました。

「ご飯がおいしかった。でも布団に不安があったので、マスクをして寝ました。」

— 筑波大学の参加学生

ホームステイ先には、受け入れ家庭の子どもだけでなく、甥や姪などの親族も集まっていました。親子だけに限らず、親戚を含む家族が近い距離で時間を過ごす。その中で学生たちは、フィリピンの大家族のあり方を、説明ではなく日常の風景として体験しました。

小さな子どもがアメリカのラップに合わせて踊る姿を見て、一緒に笑った学生もいました。「お酒は何歳から飲むの？」という質問には、年齢は関係なく家庭や親の考え次第、という答えが返ってきたそうです。文化の違いは、特別な講義の中だけにあるのではありません。食卓での会話や、家族の過ごし方、子どもが聞く音楽の中にも表れていました。

MURAVAHで見る、カカオからチョコレートまで



この日の訪問先は、アルバイ州Camaligで活動するMURAVAH Foundationです。同財団は、マヨン火山周辺の農家と連携し、カカオの栽培からMayon Goldブランドのチョコレートづくりまでを行っています。農家の生計向上、地域雇用、生物多様性を意識した農業を、チョコレートという商品につなげる取り組みです。

午前、収穫されたカカオがチョコレートになるまでの加工工程を見学しました。カカオポッドから豆を取り出し、発酵・乾燥を経て、焙煎、粉碎、成形へ。工房では実際の機械が動く様子や、チョコレートの温度を調整して口どけや艶を整えるテンパリングの工程も間近で見ました。

「これまで動画でしか見たことがなかったチョコレートづくりを、実際に目の前で見られたことに驚きました。アルバイでカカオの収穫後加工が行われていることも印象的でした。」

— Bicol University Jerby Josh Li. Saulonさん

原料のカカオ豆や、加工途中のチョコレートも試食しました。完成した商品だけを味わうのではなく、その前にある手間と技術を知ることで、一枚のチョコレートを見る目が変わっていきます。

「カカオの栽培から、チョコレートが液状になり、冷やされて完成するまでの流れを学びました。」

— 筑波大学 Chowdhury Abdulla Nasirさん

『Golden Girls』——チョコレートづくりが生む地域の仕事





工房で学生たちの目を引いたのが、チョコレートづくりを担う女性たちです。MURAVAHでは、シングルマザーを含む地域の女性に、継続的な仕事と収入の機会をつくっています。現場で親しみを込めて「Golden Girls」と呼ばれる女性たちが、機械を扱い、品質を確かめながら働く姿に、強い印象を受けた学生もいました。

「困難な状況にある女性たちを雇用し、成長の機会をつくっていることに深く感銘を受けました。農業とチョコレートづくりが、女性のエンパワーメントにもつながっていました。」

— 筑波大学 **Ozuzu Augustine Ikenna**さん

MURAVAHがつくっているのは、チョコレートだけではありません。農家からカカオを買い取り、加工し、商品として販売する。その工程の中に地域の雇用を生み、利益を教育や住居、農家への支援に還元する。学生たちは、ビジネスと地域支援を一つの循環として設計するソーシャルエンタープライズのあり方を学びました。

「MURAVAHは農家と連携し、市場より高い価格でカカオを買い取り、加工と販売を行っています。地域にどのような変化を生み出すソーシャルエンタープライズなのかを学びました。」

— 筑波大学 **Wiliter Momanyi**さん

カカオ農園で、農家の声を直接聞く



午後は、チョコレート工房からカカオ農園へ移動しました。午前に見た加工工程の出発点に立ち、木の育ち方や実のつき方を観察しながら、農家へインタビューします。

そこで聞こえてきたのは、病害虫、台風や火山災害、資材や機材の不足、土地を所有しない農家の不安定さ、若い世代の農業離れなど、複数の課題でした。カカオを植えればすぐに生活が安定するわけではありません。収穫量、品質、買い取り価格、自然災害、担い手。生産を続けるためには、さまざまな条件を同時に考える必要があります。

「病害虫、台風、火山噴火が生産性に影響していることを、農家から直接聞きました。ココナツやバナナなどと組み合わせるアグロフォレストリーについても、現場で学ぶことができました。」

— 筑波大学 **Wiliter Momanyi**さん

若者が農業を職業として選ぶには、何が必要なのか。税制上の優遇や保険制度は支えになるのか。チームによっては、農家との会話から制度の可能性にまで議論を広げました。

「若い人に農業を選んでもらう方法について、農家の方と話したことが印象に残りました。農業の魅力を体験から捉え直すことが、課題解決の糸口になるかもしれません。」

— 筑波大学の参加学生

各チームで気づきを共有。簡単には答えが出ない



農園から戻ると、各チームで一日の気づきを共有し、全体に向けて発表しました。同じ説明を聞き、同じ農園を訪れても、注目した点は異なります。技術投資、政府支援、農家の所得、若い担い手、女性の雇用、病虫害対策、自然災害への備え。専門や経験の違いが、それぞれの問いとして表れました。

中でも繰り返し議論されたのが、農薬を使わず品質やブランド価値を守ることと、病虫害による損失を抑えて収量を確保することの両立です。環境に配慮した栽培を続けたい。しかし、収穫できなければ農家の生活は成り立たない。単純にどちらかを選ぶのではなく、農家の所得、商品の価値、環境、将来の生産を一つの問題として考える必要があります。

「オーガニックと非オーガニックのトレードオフが印象に残りました。答えは一つではありません。今の暮らしを守りながら、災害時や将来にも続けられる生産方法を考える必要があります。」

— 筑波大学 **SAKATA Shunsuke**さん

「農薬を使わずに病虫害の問題を解決できれば、収量を増やし、農家の暮らしを改善できる可能性があります。ここには、解決すべき課題があると感じました。」

— 筑波大学 **Chowdhury Abdulla Nasir**さん

現地の課題を外から眺める段階から、複数の条件がぶつかる現実を理解し、自分たちなりの問いを立てる段階へ。発表では、それぞれの視点から具体的で深い意見が出ました。PBLのテーマが、少しずつ輪郭を持ち始めています。

最後は、フィリピン式のチームビルディング



考え抜いた一日の最後は、フィリピン式のチームビルディングです。始まったのは、フィリピンで「Trip to Jerusalem」と呼ばれる椅子取りゲーム。BTSの曲が流れると、学生たちは椅子の周りをただ歩くのではなく、リズムに合わせて踊り始めました。

音楽が止まった瞬間、一斉に椅子へ。勢い余って椅子が倒れる場面には、大きな笑いと歓声が起こりました。筑波大学とBU、国籍やチームの違いを越えて、会場全体が一つになった時間でした。

「音楽が止まり、みんなが椅子へ走った瞬間に椅子まで倒れたことが、今日一番記憶に残っています。」

— 筑波大学 Chowdhury Abdulla Nasirさん

ホームステイ先の食卓から、チョコレート工房、カカオ農園、農家へのインタビュー、チーム発表、そして椅子取りゲームまで。DAY 3は、地域の暮らしと産業の両方に触れた一日でした。学生たちが見つけた問いは、これから各チームの提案へとつながっていきます。



DAY 4 | 山間部の農家を訪ね、カカオ産業の課題を一人ひとりの声から考える

Guinobatanの山間部へ。農家を訪ね、地域農業の現実に向き合った一日

会話と笑顔が増えた、4日目の朝



プログラム4日目。朝の集合場所では、学生たちが大学や国籍の違いを越えて、自然に会話を交わしていました。初日に見られた遠慮や緊張は少しずつ薄れ、会話の量も笑顔も格段に増えています。

ホームステイについて尋ねると、学生たちは『慣れてきました』と嬉しそうに答えました。停電や、水を張った桶から手桶で水をすくって体を洗う「タボ」にも適応し、それぞれの家庭での出来事を楽しそうに話します。

停電したまま、ホストファミリーが宗教について1時間語ってくれた家庭。外へたこ焼きを食べに行った家庭。フィリピンのビール「Red Horse」を一緒に味わった家庭。同じホームステイでも、学生の数だけ異なる時間が

積み重なっていました。生活の違いに戸惑うだけでなく、会話のきっかけとして受け止められるようになったことにも、学生たちの変化が表れていました。

Guinobatanから始まる、長く続く関係



この日は、アルバイ州Guinobatanの山間部にあるBarangay Batbatを訪れました。現地では、地域の関係者と農家の皆さんが学生たちを迎え、ウェルカムプログラムが行われました。

Guinobatan Municipal Mayorも参加し、農家が学生たちを受け入れてくれたことへの感謝を伝えました。そして、今回の交流を、日本とフィリピンの強く、長く続く関係への一歩にしたいと語りました。大学同士の交流だけでなく、地域、農家、行政も加わり、学びを支える輪が広がっています。

「カカオ農園の訪問も印象的でしたが、市長に迎えていただいたことも忘れられません。地域から歓迎していただけたことを光栄に感じました。」

— 筑波大学 Chowdhury Abdulla Nasirさん

8つのチームが、8軒の農家へ



午前には地域の力カオ加工施設と生産の現場について学び、昼食後、8つの混成チームがそれぞれ異なる農家を訪ねました。農家までの道のりは、近いところで徒歩数分、遠いところでは30分ほど。急な坂道や未舗装路、吊り橋を越えて向かうチームもありました。

観光では足を運ばないような集落の奥へ入り、農家の暮らしと仕事をその場所で知る。坂道を登り切り、農家と向き合って初めて、その土地で力カオを育て、収穫物を運び、販売することの難しさが具体的に見えてきます。

「5ヘクタールの農園を営む農家に会うため、急な道を登ったことが印象に残りました。大変な道のりでしたが、その背景を直接聞くことができ、行く価値がありました。」

— Bicol Universityの参加学生(匿名)

「普段の旅行では訪れることのない村で、農家の方に話を聞きました。自然災害やインフラ不足が、小さなコミュニティの農家にどのような困難をもたらすのかを知ることができました。」

— 筑波大学の参加学生(匿名)

『何に困っていますか』から始まる、深いインタビュー



学生たちは、カカオの栽培方法や収穫後の加工、商品のつくり方、販売先について質問しました。さらに、収入、設備、肥料、病虫害、教育、後継者など、農家が抱える課題を掘り下げるディープインタビューを行いました。

そこで語られた課題は、一つではありません。水の確保、病虫害、肥料や農薬を買う資金、加工技術の不足、限られた販路。そして、山間部から収穫物を運ぶための道路と輸送手段。生産量を増やすだけでは、農家の所得向上につながらない現実がありました。

「カカオ農家に会い、栽培で経験している課題を直接尋ねられたことが、最も印象に残りました。課題が分かったことで、初めて解決策を考えられます。」

— Bicol Universityの参加学生(匿名)

「水、病虫害、病気は、オーガニックでカカオを育てるうえで大きな問題です。農家は技術を取り入れたと考えていても、投資が壁になります。成長には、技術改善への投資が必要だと感じました。」

— 筑波大学 Chowdhury Abdulla Nasirさん

つくる力があっても、運べなければ売れない



多くの学生が注目したのが、物流の問題です。道路が整備されていない場所では、収穫したカカオやココナツを市場まで運ぶだけでも、大きな時間と費用がかかります。農園の生産力だけでなく、どの状態で、どこまで運び、どこで加工するのか。バリューチェーン全体を見直さなければ、商品の競争力も農家の収入も高めにくいことが見えてきました。

「生産力が高くても、劣悪な道路状況のため収穫物を運べなければ、農家の生活は豊かになりません。本当の意味で農業を支えるには、インフラへのアプローチも必要だと考えさせられました。」

— 筑波大学の参加学生

「ロジスティックコストの高さが印象に残りました。バリューチェーンの中で、どの状態で運び、どこで加工するのかを見直し、売り先に対して競争力を保つ方法を考える必要があります。」

— 筑波大学 松田年史さん

一方で、道路を舗装すればすべてが解決するのか、という問いも生まれました。農業を若い世代にとって魅力ある仕事にすること、農家が加工や商品開発の知識を得ること、企業との取引条件を満たすこと。インフラと人材、技術、販路は切り離して考えられません。

一杯のtableaの向こうにある工程と暮らし



農家への聞き取りから、学生たちは、日常的に飲まれるカカオ飲料の原料「tablea」ができるまでにも、多くの手作業があることを知りました。種から育て、収穫し、発酵、乾燥、焙煎などの工程を重ねる。その手間が価格に十分反映されず、乾燥豆のまま低い価格で販売せざるを得ない農家もいます。

「朝の食卓に出るtableaになるまでには、種から収穫、発酵、焙煎まで多くの工程があり、その多くが手作業です。そのことを知り、一つひとつのチョコレートが特別に感じられました。」

— Bicol Universityの参加学生(匿名)

あるチームは、カカオとココナツを収入源とする農家から、病虫害で収穫量が減ること、農薬を買う余裕がないこと、立地のため小さな店舗にも客が限られることを聞きました。『商品をつくれば売れる』ではなく、知識、資金、加工、移動、顧客へのアクセスが連鎖していることを、農家の暮らしから学びました。

同じ農村を見ても、見つけた問いは違う



8つのチームは、異なる農家を訪ねました。だからこそ、持ち帰った発見も異なります。肥料への政府支援が十分ではないこと、オーガニック肥料と化学肥料の効率の違い、民間企業の取引要件を満たせず地域市場に販路が限られること、高齢の農家が生活と文化を守るために生産を続けていること。

農業を続けることは、農家本人のためになるのか。若者が支える仕組みは持続可能なのか。道路整備は根本的な解決なのか。学生の視点は、目の前の不便を解消する案から、その先にある産業構造や生き方へと広がっていきました。

前日に加工施設と農園を見た学生たちは、この日、さらに一人ひとりの生産者の暮らしへ踏み込みました。力カオの生産、加工、商品化、販売を一本の線として捉え、その途中のどこで価値が失われ、何が農家の選択肢を狭めているのか。最終提案に向けて、各チームが向き合う課題の解像度が一段と高まった一日となりました。



DAY 5 | 学びの舞台はCBSUAへ。農業研究の最前線で未来を考える。

GuinobatanからCBSUA-Pili Campusへ。竹、タロイモ、在来作物、ハリナシバチから地域の未来を考えた一日

『また会いたい』が残った、ホームステイ最後の朝



プログラム5日目の朝。数日間を過ごしたホストファミリーに見送られ、学生たちはGuinobatanを出発しました。握手を交わす人、抱き合う人、何度も手を振る人。短い滞在でしたが、別れを惜しむ様子があちこちで見られました。

到着したばかりの頃、学生たちは日本とは異なる水の使い方や停電、住環境、家族の過ごし方に驚き、戸惑うこともありました。しかし、同じ食卓を囲み、家事を手伝い、停電の時間にも会話を続けるうちに、違いよりも、迎えてくれた人の温かさが心に残るようになっていきました。

フィリピンに長く関わる人の間では、訪れる前の不安、暮らしの違いへの戸惑い、そして帰る頃を感じる寂しさを、三つの涙にたとえることがあります。今回の学生たちにも、それに似た心の動きがあったのかもしれませんが。生活の違いを知ることから始まり、最後には、そこに暮らす人とのつながりを手放しがたく感じる。ホームステイは、フィリピンを『外から見る場所』から、『大切な人がいる場所』へ変えていました。

「皆さん礼儀正しく、私たちが用意した食事を何でも食べ、食器洗いも手伝ってくれました。何より、一緒にいて本当に楽しい学生たちでした。」

— ホストファミリー **Prof. Marinette Opeña**さん

「家族の日課にも進んで参加し、私たちの文化を学びながら、自分たちの文化も共有してくれました。短い間でも家族として迎えられたことは、私たちにとっても価値ある文化交流でした。」

— ホストファミリー **Dr. Alma O. Satimbire**さん

受け入れ家庭にとっても、ホームステイは一方的に何かを提供する時間ではありませんでした。年齢が近く、二人でたくさん話したこと。学生が自分の希望を伝え、新しいことにも心を開いてくれたこと。ホストファミリーからも、それぞれの家庭だけの思い出が語られています。

田園風景の先にある、CBSUA-Pili Campus



バスは、のどかな田園風景の中をCamarines Sur州Piliへ進みます。次の訪問先は、Central Bicol State University of Agriculture (CBSUA) です。

CBSUAの歴史は、1918年に設立された農業学校にさかのぼります。現在のPili Campusは広大な農業用地にあり、農業と関連技術の教育・研究に加え、その成果を地域へ届ける普及活動にも力を入れています。大学が掲げるのは、農業と産業技術を通じて、持続可能で将来に備えた地域をつくることです。

Carmel Agri-Learning Farmで出会った農業と日本との縁



CBSUA-Pili Campusへ向かう途中、学生たちはCarmel Agri-Learning Farmを訪れました。農園を案内してくれた経営者から、祖父が熊本出身だと聞き、まさかのフィリピンの農村で、思いがけない日本とのつながりを感じました。初めて訪れた場所でありながら、会話のきっかけが生まれ、農園での時間がぐっと身近なものになりました。

農園では、広がる田んぼや畑を歩き、栽培されている果樹や作物を間近で観察しました。豚舎にも案内され、作物を育てるだけでなく、家畜を含む複数の農業活動が一つの農園の中で営まれている様子を見学しました。車窓から眺めるだけだった田園風景の中へ入り、そこで働く人の説明を直接聞く時間になりました。

農園では、台風などの災害が予想されるとき、被害を避けるために作物を早めに収穫することがあると聞きました。収穫を早めれば損失を抑えられる一方、作物の大きさや品質、販売価格に影響する可能性があります。災害への備えが、農家の収入や日々の難しい判断に直結していることを学びました。

見学後には、農園の皆さんが地域の味を取り入れた軽食を用意してくれました。小さなブドウの房を思わせる果実bignay(ビグナイ)ジュースのほか、温かい豆腐に甘いシロップを合わせるtaho、バナナを春巻きの皮で包んで揚げるturonが並びました。全てオーガニック栽培です。歩いて学んだ後に味わう軽食は格別で、学生たちにとって、農業が地域の食や人をもてなす文化につながっていることを感じる時間にもなりました。

「農家が災害前に早めに収穫して損失を避けていることを知りました。地域のレジリエンス、環境保全、農業が深く結びついていると感じました。」

— 筑波大学 Ozuzu Augustine Ikennaさん

多くの教職員が迎えた、CBSUAでの初日



CBSUAでは、Vice Presidentをはじめ、多くの教授や職員の皆さんが学生たちを迎えてくれました。プログラムの準備に携わった方々が次々と挨拶に訪れ、その温かな歓迎に、参加者一同、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

筑波大学とBicol Universityの学生に、CBSUAの学生が加わります。CBSUAの学生にとっても、多様な国や文化的背景を持つ参加者と対話する機会です。初対面の緊張はありながらも、小さな会話から新しい交流が始まりました。

「海外の学生と実際に話すのは、今年一番の思いがけない出来事の一つでした。深い話も、ちょっとした会話も、初日の大切な思い出です。」

— CBSUAの参加学生(匿名)

昼食会場へ向かう途中、学生たちは、汗が流れるほどの暑さの中、壁のないオープンエアの教室で授業を受けるCBSUAの学生たちを目にしました。自然の風が通る学びの場も、キャンパスの日常を知る一つの風景でした。



在来作物を地域産業・災害対策と食料供給に活かす



昼食後は、CBSUA Agrivilleで、竹やタロイモ、ube、在来作物を地域産業と食料供給に活かす取り組みについて学びました。竹は家具や生活用品に加工し、適切に資源を管理することで地域の仕事や災害時のレジリエンスにつながられます。

「竹はさまざまな製品になり、地域の生計を支えます。普段は意識しない資源でも、その由来と適切な管理を知ることが重要だと学びました。」

— CBSUA Generous L. Alocさん

タロイモでは、葉も食用にできることや、タロイモミルクなどの商品開発、衛生管理について説明を受けました。また、地域固有の作物と遺伝資源を守り、栽培の選択肢を増やすことが、環境変化や災害に強い食料生産につながることも学びました。

「タロイモの葉を食べられること、竹製品が地域の仕事になること、ミミズを使って有機肥料をつくれることを学びました。」

— 筑波大学 Wiliter Chemutai Momanyiさん

レクチャーの合間には、フィリピンのプログラムではおなじみのアイスブレイクが始まりました。日本の大学行事ではあまり見られないほど、音楽やゲームに全員が参加します。講師も学生も一緒になって笑い、初めて加わったCBSUAの学生との距離も一気に縮まりました。

刺さない蜂が、農業と生態系を支える



この日、特に多くの学生の記憶に残ったのが、ハリナシバチです。学生たちは巣箱の管理について説明を受け、巣から採れた蜂蜜や花粉、プロポリスを実際に試食しました。日本で一般的な蜂蜜とは異なる、酸味を含んだ複雑な味に驚く声も上がりました。

「日本で食べてきた蜂蜜とは違い、ハリナシバチの蜂蜜には、みたらしのような少し酸味のある味を感じました。」

— 筑波大学の参加学生(匿名)

「花粉には苦味のある独特な後味がありました。一方で、ハリナシバチが想像以上に小さいことや、竹に多くの用途があることも、実際に見たからこそ理解できました。」

— CBSUA Yuri Gabrielle A. Bonaさん

ハリナシバチは蜂蜜を生むだけではありません。マンゴーやキュウリなどの受粉を助け、作物の生産と生態系を支えます。養蜂は農家の副収入になる可能性がある一方、蜂が集められる植物環境、飼育規模、品質管理、消費者が好む味の商品づくりにも必要です。環境への貢献と事業としての成立を、同時に考えるテーマでした。

「ハリナシバチは収入源になるだけでなく、受粉を通して環境を支えます。養蜂場を案内し、筑波大学の学生に管理方法を説明できたことで、私自身の学びと交流にもなりました。」

— CBSUA Generous L. Alocさん

「巣から採れたばかりの蜂蜜を食べたことが最も印象に残りました。針のない蜂が受粉を助け、農業の生産性向上につながることを学びました。」

— 筑波大学 相原悠人さん

大学の研究を、地域で使える力にする



学生たちは、土壌やミズを利用した堆肥づくりについても説明を受けました。竹、タロイモ、在来作物、ハリナシバチ、土壌。それぞれは別の研究テーマに見えます。しかし、地域の資源を活用し、生産性を高め、農家の収入を増やし、災害や環境変化に備えるという点でつながっています。

「農業研究が、地域社会のレジリエンスや経済発展と深く結びついていることを学びました。農家を支え、農業を商業規模に広げるには、大学の科学技術と行政の多角的な連携が必要です。」

— 筑波大学 Kaede Watanabeさん

一方で、プログラム全体のテーマであるフードサプライチェーンやリスクマネジメントについて、参加者間で定義や前提をそろえる必要がある、という率直な意見も出ました。多様な専門を持つ学生が協働するからこそ、同じ言葉を何として捉えるのかを確認することも、これからの提案づくりには欠かせません。

キャンパスツアーを終え、学生たちは学内の宿泊施設へ移動しました。その後も、学生たちはキャンパス内でスポーツをしたり、会話を続けたりして過ごしました。筑波大学、Bicol University、CBSUAの三大学の学生が、ようやく同じ場所に集まった一日。農業の知識を交換するだけでなく、新しい仲間として関係をつくる時間が始まりました。

ホームステイで地域の暮らしを知り、CBSUAで研究と地域実践のつながりを知る。DAY 5は、これまでのフィールドワークで見つけた課題に対し、大学の知識と技術がどのような答えを返せるのかを考える一日となりました。



DAY 6 | 海と農地の未来を学び、 三大学の仲間と過ごした夜

CBSUA-CalabangaからPili Campusへ。沿岸管理、農業イノベーション、文化交流がつながった一日

『この地域に目を向けてくれて、ありがとう』



プログラム6日目。一行はCBSUA-Pili Campusを出発し、Camarines Sur州のCalabanga Campusへ向かいました。ここはSan Miguel Bayに面し、農業だけでなく水産業や沿岸地域の課題を研究するキャンパスです。

オープニングでは、Dr. Jeremy Nollosoが学生たちを迎えました。これから学ぶのは、海とともに暮らす人々の仕事、食料へのアクセスが限られる地域、そして地域の生計を支える人材の不足です。若い世代が地域の課題に関心を持ち、遠くから学びに来てくれたことへの感謝が、力強い言葉で語られました。

「地域を支える担い手が少なくなる中、若い皆さんがここへ来て、私たちの課題に目を向けてくれたことを本当に嬉しく思います。」

— CBSUA-Calabanga Dr. Jeremy Nolloso

歓迎のテーブルには、フィリピンのローカルストリートフードが並びました。ごまをまとったもち米菓子のbutsi、魚のすり身を揚げたfish ball、もちもちとした米粉菓子kutsinta。CBSUAの皆さんが用意してくれた料理を囲みながら、朝の交流が始まりました。



最初の講義では、Dr. Agnes FaustinoからSan Miguel Bayの沿岸資源を守る取り組みを、Prof. Niña Francia B. Bergonioから若い世代が農業へ参加できるNeo-Normal AgVenture Projectを学びました。San Miguel Bay Research and Innovation Centerは、地方自治体、漁業者、地域住民と連携して沿岸管理を支援し、海洋資源を守りながら地域の食料供給と雇用を支えています。一方、AgVenture Projectでは、農業を生産だけでなく、加工、販売、観光、テクノロジーと結びつけ、大きな資金や完璧な設備を待たず、手元にある資源から小さく始める考え方が紹介されました。海と農地の資源を持続的に活用し、若い世代が挑戦できる地域産業を育てるには、大学、行政、事業者、地域住民の連携が欠かせないことを学びました。

「農業の取り組みは、すべての資源や答えが揃っていないでも始められます。研究、事業、エネルギーの革新、そして連携が、農家に大きな変化をもたらすことを学びました。」

— 筑波大学 Ozuzu Augustine Ikennaさん

「Calabangaでのアグリプレナリシップの講義は、若者を農業に巻き込む方法を考えるうえで、とても示唆に富んでいました。」

— 筑波大学 Wiliter Chemutai Momanyiさん

ナガの文化を、演じ、踊り、体験する



講義の後は、CBSUAの学生団体SAMBITによる文化ショーです。披露されたのは、ナガ周辺の祭礼文化を題材にした、物語性のある歌と踊り。色鮮やかな衣装と、真剣な表情で展開される力強い演技に、会場は一気に引き込まれました。

鑑賞の後は、参加学生もフィリピンの伝統舞踊Tiniklingに挑戦しました。二本の竹が開閉するリズムを読み、挟まれないように足を運びます。最初は恐る恐るだった学生たちも、CBSUAの学生に教えてもらいながら、次々と竹の間へ。成功すると、会場から大きな歓声が上がりました。

「文化交流が最も楽しく、心に残りました。農業は、作物を育てて生計を立てるだけではなく、イノベーションと発展の機会でもあると学びました。」

— Bicol University Ashleigh Danielle Ladesmaさん

「ダンスやゲームのように、言葉を介さなくても人とつながれるものがあると感じました。」

— 筑波大学 相原悠人さん



商品として届けるための、品質と安定供給



文化交流の後は、ビコールを代表する特産品、ピリナッツの加工と販売を見学しました。原料を商品に変え、市場へ届けるには、味や安全性だけでなく、品質を一定に保ち、必要な量を継続的に供給することが求められます。

とりわけ海外市場では、qualityとconsistencyが取引の前提になります。一方、包装や保存技術には費用がかかり、輸出を優先すれば国内向けの価格や供給にも影響します。付加価値を高めながら、生産者へ継続的に利益を還元する仕組みまで設計できるか。学生たちは、商品化の先にあるサプライチェーンを考えました。

「世界に通用する品質と輸出量を確保する努力が印象に残りました。国際市場は重要ですが、現地の農家にも継続して収入が入る仕組みにしなければなりません。」

— 筑波大学の参加学生(匿名)

タロイモ、雇用、そして一枚の農地を二つに使う



Pili Campusへ戻った後は、Deloverges Farmによるタロイモ栽培の取り組み、アグリボルタイクス、CBSUA Agriville Learning Siteを見学しました。食品として安全に加工し、売れる商品にすること。栽培技術を農家の仕事と収入につなげること。前日の講義を、事業の現場から捉え直します。

アグリボルタイクスは、農地の上部に太陽光パネルを設置し、発電と作物栽培を同じ土地で行う考え方です。パネルの高さや角度を調整して、その下で作物を育てます。土地利用、再生可能エネルギー、農家の収入源を組み合わせられる一方、導入費用や維持管理を誰が担うかという課題もあります。

「CBSUAのアグリボルタイクスを訪れたことが最も印象に残りました。ビコールの大学には、タロイモ栽培から湾の管理まで豊富な知識があります。継続的な研修を通して、その知識を農家へ届ける必要があります。」

— 筑波大学 Wiliter Chemutai Momanyiさん

「農地の上に角度をつけた太陽光パネルを設置し、その下で栽培できる再生可能エネルギーの仕組みが印象的でした。農業は、適切に市場へ届けば収入を生む事業になります。」

— 筑波大学 Nancy Ongerさん

講義では、フィリピン労働雇用省の緊急雇用支援TUPADとの連携も紹介されました。農業技術だけでなく、仕事を失った人や不安定な立場にある人へ、地域の仕事と所得をつくることも、持続可能な農業を考える一部です。

Fellowship Night—言葉を越えて、一つの輪になる



一日のクライマックスは、夜のFellowship Nightです。会場には、簡易版のプリクラのようなフォトブースが用意され、学生たちは小道具を手に、大学やチームを越えて何度もグループ写真を撮りました。

ゲームでは、ペアで一枚の紙の上に立つPaper Danceに挑戦しました。音楽が止まるたびに紙が小さくなり、足が紙から離れたら負け。片足で立つ人、相手を背負う人、抱き上げる人まで現れ、会場は大きな笑いと声援に包まれました。

「相手を背負ったり、重なったりしながらPaper Danceを続ける姿を見るのが楽しかったです。最後のダンスパーティーも、今日一番の思い出になりました。」

— 筑波大学 Chowdhury Abdulla Nasirさん

続くチームパフォーマンスでは、それぞれがダンスや歌を披露しました。普段は隠していた一面を見せる学生もいれば、他大学の仲間を誘って即興で踊る学生もいます。豪勢なフィリピン料理を味わいながら、学び、笑い、踊り続けた一日を振り返りました。

「*Fellowship Night*では、好きな料理を味わい、海外の学生に説明し、普段は隠している才能も披露できました。大切なイベントを締めくくる、最高の時間でした。」

— CBSUA Generous Luistro Alocさん

『これは、私たちが誇る文化だから』



PHLIGHTのスタッフが、『マニラでは、ここまで熱烈に迎えてもらった経験はありません』と伝えると、CBSUAの教授は笑いながら、しかし誇らしげに答えました。

「それではだめだよ。これは、私たちの文化なのだから。フィリピンのホスピタリティは、世界に誇れる文化です。」

— CBSUAの教授

これまで多くの国や地域を訪れてきたスタッフにとっても、CBSUAの歓迎ともてなしは、過去に例を見ないほど温かなものでした。料理、講義、文化ショー、ゲーム、そして一人ひとりにかけられた言葉。そのすべてに、『来てくれて嬉しい』という気持ちが表れていました。

引率した教員からは、プログラムに対して、次の言葉が寄せられました。

「I hope you know you offered a life-changing experience to so many.

多くの学生に、人生を変えるほどの経験を届けたことを、どうか知ってください。」

— 引率教員

San Miguel Bayの課題から、農業を若者の仕事にする方法、ピリナッツの輸出、タロイモ、太陽光発電、そして夜の文化交流まで。異なる大学、国籍、専門を持つ学生たちが、ともに学び、ともに笑った一日でした。ここで築かれた関係と、CBSUAで受け取った温かさは、きっと長く心に残ります。



DAY 7 150キロ先のGubatへ 地域の言葉と海辺の暮らしを知る

CBSUAとの別れからBU Gubatでの地域理解へ 最終プレゼンテーションを前に交流と対話を重ねた一日

CBSUAからGubatへ出発



前夜のFellowship Nightの余韻が残る朝。この日は日本の「ラジオ体操」をフィリピンの学生たちに教えていました。こうしたちょっとした異文化交流も、非常に重要です。

さて、学生たちは、次の訪問地であるSorsogon州Gubatへ向かうため、早朝にCBSUAを出発しました。移動距離はおよそ150キロです。

出発時には、CBSUAの学生たちが見送りに来てくれました。前日によく三大学の学生がそろい、一緒に学び、踊り、笑ったばかりです。短い時間でも築かれた関係を惜しみ、何度も写真を撮り、手を振りながら別れを告げました。

「これまで受けたフィリピンの皆さんのおもてなしが、最も心に残っています。同時に、自分が普段どれほど恵まれた環境で暮らしているのかも考えました。」

— 筑波大学 松田年史さん

太平洋に面する町 Gubatを知る



長い移動を終えてBicol University Gubat Campusへ到着。食事を終えた午後1時から、『Community Development and Sustainable Development in Bicol』をテーマにしたプログラムが始まりました。

GubatはSorsogon州東部、太平洋に面する人口約6万1,000人の町です。約1万1,100ヘクタールの土地に42のbarangayがあり、農業と漁業が地域の暮らしを支えています。同じBicol地方でも、使われる言葉はLegazpiやNaga周辺とは異なります。Gubatで話されるGubatnonは、BikolとBisayaの特徴をあわせ持つ言葉としてBisakolとも呼ばれます。

講義では、Gubatの人口や土地、文化、産業、地域が抱える持続可能な開発上の課題が紹介されました。海と農地の両方に支えられた町だからこそ、気候変動や自然災害、資源管理、地域の仕事を一体として考える必要があります。

「Gubatの文化と美しい言葉について学びました。異なる文化の人と関わり、一つひとつの経験を心から受け止めることの大切さを感じました。」

— 筑波大学 **Wiliter Chemutai Momanyi**さん

同じBicolでも異なる言葉と文化



Academic Talkに続き、テーマは文化交流へ移りました。Sara Em Buluranさんから、Gubat Campusや地域の特徴、Gubatnonの基本的な言葉とフレーズを教わります。学生たちは聞き慣れない言葉を声に出し、今度は自分たちの国や地域の言葉を紹介しました。

「Gubatnonの言葉を学んだことが印象に残りました。文化を祝い、使い続けることは、その文化を守る方法でもあると感じました。」

— 筑波大学の参加学生 匿名

「『Magayonon ka』という『あなたは美しい』と伝える言葉を学びました。相手の言葉で声をかけることは、距離を縮めるよい方法だと思います。」

— 筑波大学 **Victor Overcomer Onyeka**さん

学生コメントには、地域に根を持ちながら、学びや仕事に取り組む姿への気づきもありました。異文化を知ることは、自分の文化を相対化するだけではありません。離れた場所で学ぶ学生にとっては、自分がどこから来たのか、何を受け継いできたのかを考え直す時間にもなりました。

「地域の人が自分たちの文化を誇り、訪問者を温かく迎える姿を見て、文化交流は違いを埋め、長く続く協働の土台になると実感しました。」

— 筑波大学 **Ozuzu Augustine Ikenna**さん

熱烈な歓迎に心動かされる日本の学生



セレモニーの途中には、フィリピンのプログラムに欠かせないmerienda（おやつ）が配られました。到着後に昼食をいただいたばかりでも、交流の場には食事とおやつがあります。食べ物を分かち合うこと自体が、歓迎と会話の一部になっていることを、学生たちも理解し始めていました。

学生同士の交流が始まると、BU Gubatの学生たちは次々に声をかけ、グループ写真を撮ろうと誘います。初対面でも遠慮せず、うれしさを率直に表現する。その距離の縮め方は、日本の大学生活では経験できないものでした。

「初対面にもかかわらず、Gubat Campusの学生たちは積極的に話しかけ、歓迎してくれました。その喜びをまっすぐ表現する姿に心を動かされました。」

— 筑波大学の参加学生 匿名

海辺の時間とLittle Siargaoの夜



BU Gubat Campusを後にし、学生たちは太平洋を望む海辺のヴィラへ移動しました。荷物を置くと、すぐに海へ向かう学生たち。波の中で遊び、砂浜で写真を撮り、長時間の移動と講義を終えた午後を仲間と過ごしました。

夕方からは、近くのBuenavista Tourism Hubへ。海辺の雰囲気から、地元で『Little Siargao』とも呼ばれる、飲食店が並ぶにぎやかなエリアです。学生たちは屋台を巡り、それぞれ好きな料理を選びました。

テーブルに並んだのは、豚を丸ごと焼くlechon、豚の血を使った煮込み料理dinuguan、細かく刻んだ肉を鉄板で焼くsisig、shawarma riceなど。見た目や材料に驚きながらも、現地の人々が日常的に楽しむ料理を味わいました。音楽と会話が絶えない夜市の空気も、Gubatの暮らしを知る体験になりました。

「昼はビーチへ行き、夜は露店で現地の料理を味わいました。特にsisigがおいしく、活気のある雰囲気を体験したことで、地域の食文化と暮らしへの理解が深まりました。」

— 筑波大学 **Kaede Watanabe**さん

「ビーチ沿いのマーケットが楽しかったです。フィリピンの人たちが音楽をととても好きだということも感じました。」

— 筑波大学 相原悠人さん

楽しい夜の先にある最終発表



海辺での夕食を終えた後も、一部のチームはヴィラに集まり、月曜日の最終プレゼンテーションに向けて準備を続けました。農家の声、カカオの生産と加工、物流、災害、農業技術、地域の仕事。これまで見聞きした多くの情報から、何を課題として選び、誰に向けた提案にするのかを話し合います。

「異なる文化的背景を持つメンバーで、より洗練されたプレゼンテーションをつくるのは難しいですが、同時に楽しい経験です。」

— 筑波大学の参加学生 匿名

意見がかみ合わないときに、相手の考えをどう受け止めるか。誰かが答えを押しつけるのではなく、メンバーを支えながら議論を前へ進められるか。現地の課題について提案する前に、多文化チームとしての協働そのものが、学生たちに問いを投げかけていました。

CBSUAで受け取った温かな見送りから、Gubatの言葉と文化、BUの学生との交流、海辺の食文化、そして夜のチームミーティングまで。DAY 7は、地域を知る時間と、最終提案を形にする時間が重なった一日でした。



DAY 8 現地で得た学びを最終提案へ変える

Sorsogonでのチーム作業からGuinobatanでの夜の準備まで

海から始まる朝



前日の長距離移動と交流プログラムを終え、迎えたのは穏やかな海辺の朝でした。窓の外には明るい海が広がり、早朝から海へ入る学生や教員の姿もありました。

「Bicol UniversityのHana先生、CBSUAの先生と一緒に朝の海で泳いだことが、最も印象に残っています。」

— 筑波大学 Kriti Thapaliyaさん

短い自由時間を思い思いに楽しみながら、出発時刻が近づくと、BUの学生たちがメンバーへ声をかけます。荷物と人数を確認し、全員が時間どおりにバスへ乗れるよう動いてくれました。

楽しむときは思い切り楽しみ、必要な場面では周囲を見ながら動く。ここまでのプログラムを支えてきたBUの学生たちの責任感が、この朝にも表れていました。

最終提案をつくる一日



DAY 8の中心は、翌日に控えた最終プレゼンテーションの準備です。少し眠そうな表情を見せながらも、学生たちは8つのチームに分かれ、これまでのメモ、写真、インタビュー結果を整理しました。

農家や事業者が語った困りごととは何か。その背景にはどのような原因があるのか。誰に向けて、どのような解決策を提案するのか。見聞きした情報を並べるだけでなく、地域の声と実現可能性を結びつける作業が始まりました。

パソコンを開き、必要な情報を調べ、スライドの構成や発表の役割を相談します。文化や専門、母語の異なるメンバーが一つの提案をつくるには、考えを明確に言葉にし、相手の意図を確かめる必要があります。

「プレゼンテーションの準備を通じて、チームワークと明確なコミュニケーションの重要性を学びました。」

— 筑波大学 Kaede Watanabeさん

英語で考えを伝えきれず、議論へ十分に加われなかったと振り返る学生もいました。その悔しさは、語学力だけでなく、異なる背景を持つ相手と合意をつくる力を今後身につけたいという、具体的な目標につながっています。

「英語で自分の主張を伝えられず、うまくディスカッションできませんでした。自由に議論できるよう、英語学習に取り組みたいです。」

— 筑波大学 相原悠人さん

SM City Sorsogonで見るもう一つの日常



学生たちはSorsogon Cityの大型商業施設、SM City Sorsogonへ移動しました。農村、大学、海辺の地域を訪れてきた学生にとって、整った売り場や多くの飲食店が並ぶモールもまた、現地の暮らしを知るための場所です。館内にはStarbucksなどの店舗もあり、買い物や食事を楽しむ人々の日常に触れました。

フィリピンの生活を理解するには、一つの景色だけで地域を捉えないことが大切です。農家の暮らしも、ホームステイ先での生活も、若者が集まる都市の商業施設も、同じ地域社会を形づくっています。

「地元のショッピングモールを訪れ、チームメンバーと一緒にプレゼンテーションの準備に取り組んだことが印象に残りました。モールでは現地の人々の日常生活を見ることができ、自分の視野が広がりました。」

— 筑波大学 Kaede Watanabeさん

「車線から町の建物まで、日本とは何もかも違って見えました。自分が知っている世界や常識は、決して普遍的ではないと学びました。」

— 筑波大学 水野嘉子さん

午後2時過ぎ、学生たちはSorsogonを後にし、明日の最終プレゼンテーションの舞台、Albay州Guinobatanへと再び向かいました。

宿泊先の変化から地域の多様さを知る



この日の宿泊先は、GuinobatanのIto'sです。到着した学生からは、明るい表情で『段々上げてきましたね』という声も聞かれました。まだ最終発表を終えてはいませんが、ここまで学び切った充実感が表情ににじんでいました。

本プログラムでは、宿泊環境も地域理解の一部として考えています。前半は、ホームステイや地域に近い環境で、現地の学生や家族が送る日々の暮らしを体験しました（といっても、大学に行ける家庭をベースとした良い方の暮らしです）。そのうえで、今日のように地域で利用されている質の高い宿泊施設や商業サービスにも触れます。どちらか一方だけをフィリピンの姿と捉えるのではなく、異なる生活環境や選択肢が同じ地域の中にあることを知るためです。

大切なのは、『フィリピンの日常とは何か』を外から決めつけることはありません。さまざまな人の暮らしに近づき、話を聞き、自分が持っていたイメージを更新していくことです。

夜中まで続いた準備

夕食後も、各チームの部屋では作業が続きました。スライドを整える人、データを確認する人、発表原稿を読み合わせる人。現地調査で感じたことを、限られた発表時間の中で、聞き手に伝わる提案へ変えていきます。

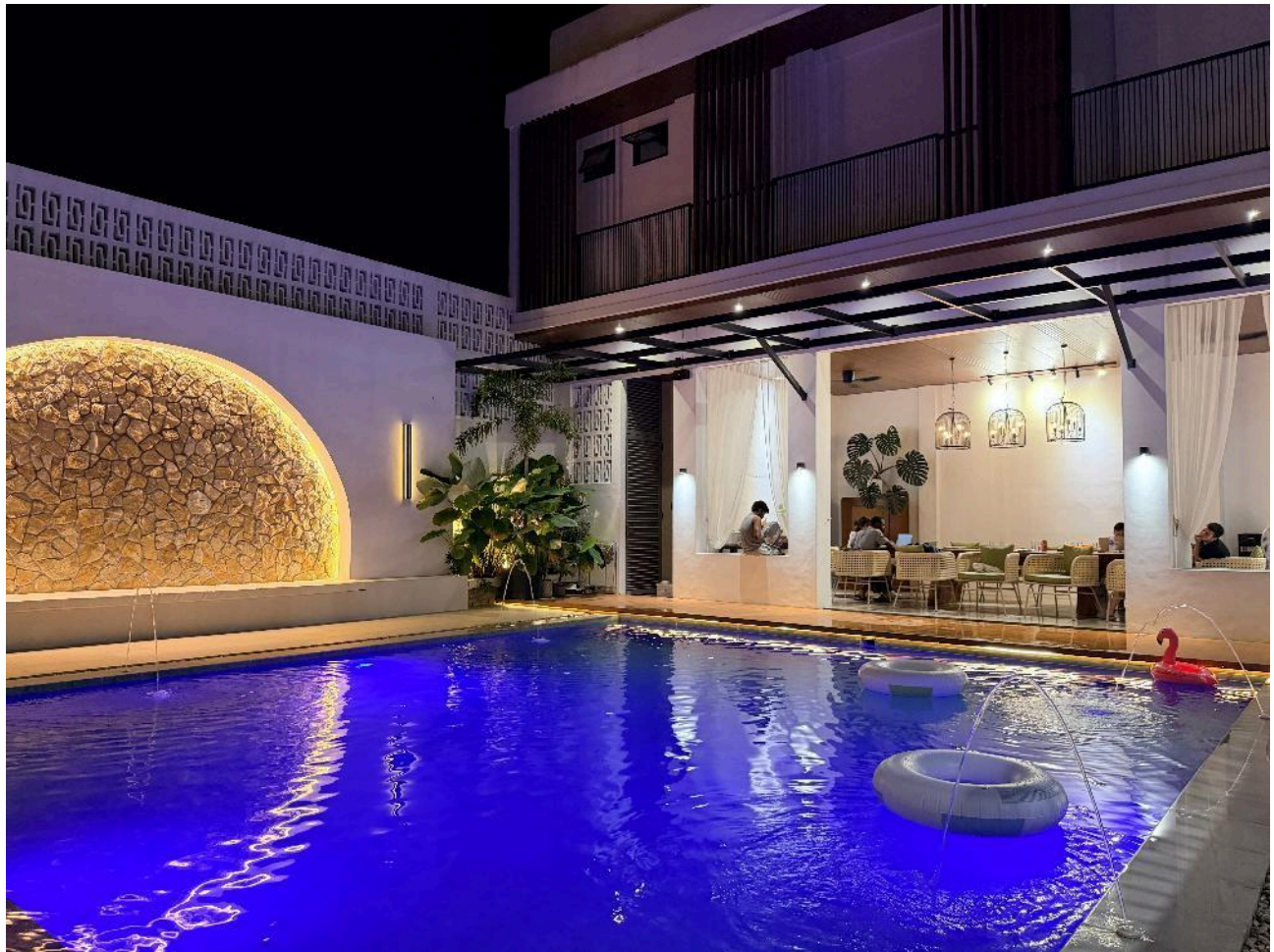
限られた時間の中で、異なる専門や文化、英語力を持つメンバーが結論を出すため、意見がぶつかることもありました。

「発表準備ではチーム内で意見が衝突しました。英語で言い返せない悔しさがあり、さらに勉強が必要だと思いました。」

— 筑波大学 松田年史さん

この経験は、英語を話せたかどうかだけで測れるものではありません。自分の考えをどう伝えるか、相手の主張をどう確かめるか、意見が違うときにどのように合意をつくるか。多文化協働に必要な力を、学生たちは実際の緊張感の中で学びました。

DAY 8は、新しい訪問先を次々に巡る日ではありませんでした。しかし、これまでの経験を振り返り、何を学び、何を提案するのかを言語化する、プログラムの中でも重要な一日です。海辺の朝から始まった一日は、Guinobatanの静かな夜へ。学生たちは翌日の最終プレゼンテーションに向けて、夜遅くまで準備を続けました。



DAY 9-10 現地で得た学びを提案へ そして帰国

APAOでの学びと8チームの最終発表 10日間のプログラムを終えて

DAY 9 農業を支える仕組みを知る



最終プレゼンテーションを迎える朝、学生たちはAlbay Provincial Agricultural Office（APAO）を訪れました。APAOはアルバイ州政府の農業行政と技術支援を担う機関です。農家への研修、食料安全保障、事業開発、農業技術の普及などを通じて、生産者と地域の産業を支えています。フードサプライチェーンを考えるうえで欠かせない公的な拠点です。

当初は州知事による歓迎の挨拶が予定されていましたが、急な変更により来訪は取りやめとなりました。フィリピンの式典では、来賓を迎えてから開会することが重視されるため、会場ではしばらく開始を待ちました。予定どおりに進まない時間も含めて、異なる社会の進め方を知る経験になりました。

フィリピンの学校行事や公的な式典は、一般にInvocationまたはOpening Prayerと呼ばれる開会の祈りから始まり、フィリピン国歌、歓迎の言葉へと続きます。この日も祈りが始まったところで、突然会場が停電しました。音響設備が止まったため、参加者は国歌をアカペラで歌いました。

復旧を待つだけでなく、運営側はその場で順番を変更し、参加者を施設ツアーへ案内しました。計画どおりにいかない状況でも、できることから進める。フィリピンらしい柔軟さが表れた場面でした。

養蜂とピリとカカオと乳製品の現場



施設ツアーでは、APAOのBee Farm、Dairy Barn、Pili Processing、Cacao Processingを見学しました。OIC Provincial AgriculturistのDaryl John O. Buenconsejo氏から、州が進める農業プログラムと施設の役割について説明を受けました。

ハリナシバチの養蜂では、ココナツの殻を巣として活用する方法や、専用の巣箱、蜂蜜の採取、コロニーを分けて増やす管理方法を学びました。受粉は周辺作物の生育にも関係し、養蜂は農家の副収入だけでなく、生態系と地域農業を支える可能性を持っています。

「ハリナシバチとココナツ農業が、生態面でも経済面でも結びついていることを学びました。身近な資源と環境に配慮した方法を組み合わせることで、農村の所得、環境、地域のレジリエンスを同時に高められると感じました。」

— 筑波大学 **Ozuzu Augustine Ikenna**さん

「APAOのツアーと提案発表が印象に残りました。養蜂、ピリ、カカオ加工など、州が進めるさまざまな農業プログラムを学びました。」

— Bicol Universityの参加学生 匿名

農業と太陽光発電をつなぐ



施設見学の後には、NoveLight Solar Servicesのオーナーであり、Tabaco Collegeの工学・農学分野で教えるEngr. Jilbert Novelero氏による講義が行われました。テーマは、太陽光発電の基本、よくある誤解、安全な設置方法です。学生たちはパネルや配線に触れながら、電力インフラが十分でない地域で再生可能エネルギーをどう活用できるかを考えました。

「稲作についての発表を通じて、エルニーニョの時期にも農家が水を確保できるよう、太陽光を利用した灌漑をどう改善できるかを学びました。」

— 筑波大学 Wiliter Chemutai Momanyi さん

電力は、灌漑、乾燥、冷蔵、加工、通信など、フードサプライチェーンのさまざまな工程を支えます。前日に議論した作物乾燥機の提案ともつながり、エネルギーを農業課題の一部として考える視点が加わりました。

8チームが示した地域への提案



午後はBU Guinobatanへ移動し、最終プレゼンテーションが行われました。開会挨拶はDeanのDr. Roscefe B. Dy氏。審査員の紹介、評価基準の説明に続き、午後2時から全8チームがResearch Proposalを発表しました。

テーマは、農作物の生産性向上、特産物を生かした新商品開発、輸送網の改善による食品ロスと労働負担の軽減、太陽光発電を活用した農業インフラ、AIや新しい知見を活用する農業システムなど多岐にわたりました。どの提案にも、農家、加工事業者、大学、行政の現場で聞いた声が反映されていました。

「どのチームにも創造性と工夫がありました。私たちも輸送を農家にとって重要な課題だと考えていたので、輸送の提案が選ばれたことをうれしく思います。将来、本当に実施され、農家が作物を安全かつ効率的に運べるようになることを願っています。」

— 筑波大学 Kriti Thapaliya さん

「自分たちの提案と、フィリピンで経験したことを人前で発表したことが最も印象に残りました。ほかのチームが現場で見つけた課題と、その捉え方からも学ぶことができました。」

— 筑波大学 Chowdhury Abdulla Nasir さん



優秀提案に選ばれたのは、農産物の輸送課題に着目した**Kablecacao**です。収穫物を安全かつ効率的に運ぶ仕組みを考え、生産した作物を必要な場所へ届けるまでをサプライチェーンとして捉えました。

どうしてケーブルカーの発想が出てきたのか？と尋ねたところ、

「筑波山のケーブルカーが頭に浮かんだんです。」

ここで筑波とBicolが繋がったことに、このプログラムの醍醐味を感じずにはいられませんでした。

Real Experienceが生んだもの



発表後には修了証が授与され、学生代表と関係者がメッセージを伝えました。

「正直、シャワーとトイレには本当に苦労しました。初日はトイレで20分ほど、どうすればよいのか分かりませんでした。それでも、またビコールに戻ってきたいです。」

ー 筑波大学の参加学生

「ここには十分な電気も、Wi-Fiも、インフラありません。それでも私たちには、誇りにしているホスピタリティがあります。」

ー プログラムに参加したフィリピン人教員

農業技術や物流の提案は、すぐに実装できるものばかりではありません。しかし、現地で同じ時間を過ごし、困りごとを自分の問題として考えた学生が生まれたことは、次の協働への確かな土台です。

初日は不安そうだった学生たちの会話が少しずつ増え、笑顔が増えていく姿を見してきました。ソーシャルインパクトを考えるうえで、表面的な理解だけでは十分ではありません。

本当に課題を解決したいと思うには、人と出会い、その暮らしに触れるReal Experienceが必要です。次世代のリーダーである筑波大学、Bicol大学、CBSUAの学生が、大学や国籍を越えて学び、知識や文化や思いを共有し、強い関係を築いたこと自体が、今回生まれた大切なソーシャルインパクトです。

DAY 10 空港で迎えた別れの朝



帰国の日。空港にはBUの学生たちが見送りに来てくれました。10日前には、何を話せばよいか分からず、互いに少し距離のあった学生たちです。最後の朝には、写真を撮り、別れを惜しみ、再会を約束する関係になっていました。

そうそう、今日は9月1日。Ber monthsと呼ばれるクリスマスシーズンの始まりです。September、October、November、Decemberと、月名がberで終わる4か月を指します。

日本人にとっては早すぎるクリスマスソングが流れる空港で、学生たちは日本へ向かう飛行機に乗りました。

後日談: 地域と大学をつないだ10日間

今回の取り組みは、参加した学生だけにとどまらず、地域にも伝えられました。アルバイ州政府の公式広報は、APAOでの農業・サステナビリティ交流を紹介し、Bee Farm、Pili and Cacao Facility、Dairy Box enterpriseの見学と、筑波大学、Bicol University、PHLIGHTによる教育連携を報じました。Bicol UniversityとCBSUAも、それぞれ公式媒体でプログラムを発信しています。



筑波大学、Bicol University、CBSUA、PHLIGHTが連携し、日本とフィリピンの学生が地域の農業、食料安全保障、産業、持続可能性について共に考えた10日間。学生の学びをつくるだけでなく、大学と大学、日本とフィリピン、次世代のリーダーと地域社会をつなぐ時間になりました。

提案を一度発表して終わりにせず、地域の人々とどのように検討を続け、実行可能な形へ近づけられるか。10日間で生まれた関係を、次の学びと協働につなげていきましょう。